

「高麗博物館」を訪ねて
 東京のコリアンタウン
 大久保にある市民交流の博物館

韓国家庭料理の店が立ち並び、スーパーや餅屋など韓国のものなら無いものがないんじゃないかと思われるほど韓国色に染まった東京大久保コリアンタウン。韓流スターのグッズを扱う店が急増した街のど真ん中に、在日と日本人の市民の運営する小さな博物館がある。

ここ、「高麗博物館」は「日本と韓国・朝鮮の豊かな交流を知り、歴史を多角的にとらえ隣人として平和で友好的な関係を築いていく、そういう『場』としての博物館活動をめざして」10余年の準備期間を経て、2001年にオープンした。

今年8月から10月末まで特別展示として「朝鮮人戦時労働動員（強制連行）を考える—加害の記憶と和解—」展が開かれた。樋口雄一さんの講演会やシンポジウムなども催された。私がお邪魔した日にはちょうどビデオ上映会があり、片山通夫氏の『アリランの流れる島』を観ることができた。

これまで「日本・韓国・朝鮮—切手と紙幣展」、「富山妙子版画展」などの企画展を催し、「在日コリアンが語る現実」という連続講座も開いてきた。ユニークなのは「総合学習 出前講座」。小中学校などに「講座」を出前する。館長の宋富子さんによる一人芝居「在日三代史」が人気だ。

来館者は平均すれば一日6、7人という。町内会のグループや自治体の人権講座の参加者も。団体の場合、学校関係が結構多い。中高生、大学生、院生に教師。修学旅行の自由行動で訪れる中学生もある、という。時には100人ほどの団体も。

運営は理事と大勢のボランティアによって担われている。日常的な活動だけではなく、展示や講座などもそうなのだ。ボランティアは登録制で100人くらいがすでに登録、そのうち実際に動いているのは30人ほどだという。多くの人が自主的に運営に携わっている

ことに驚かされる。私の友人は、宋富子さんの一人芝居を観て感銘を受け、即ボランティア登録をしたと言っていた。理事も実質ボランティアで、財政は会員制（正会員、維持会員等。年会費5千円）で支えている。

博物館では、チマチョゴリを試着したりカヤグムに触ってみることも出来る。ちょうど、私と同世代?の女性が一度着てみたかったと、黄緑色とエンジの綺麗なチマチョゴリを着てみていた。80歳になるお母さんと娘さんお二人で、ヨン様にハマってる、としばし盛り上がる。新聞で見てここを知った、こういうこと[強制連行]も知らなくてはと、娘さん。でも、こういう来館者は多くはない。道行く人は多いのになかなか上がってきたくれない(ここはビルの7階にあるのだ)、どうしたら入ってきってくれるかが課題だとスタッフは言う。

今後の企画としては、12月から来年2月まで「文化講座—音楽舞踊・交流の歴史—」と題する連続講座が、また、来年8月には「在日を生きる」と題して徐元洙さんの個人史展が開催されることになっている。(北原道子)

- 【NPO法人高麗博物館】
- *東京都新宿区大久保1-12-1 第2韓国広場ビル7階
- *電話 & FAX: 03-5272-3510
- *開館時間: 12:00 ~ 17:00
- *休館日: 月・火曜日
- *入館料(常設): 300円(一般)、150円(中高生)
- *<http://www.40net.jp/~kourai/>
- ***会員募集中!**

